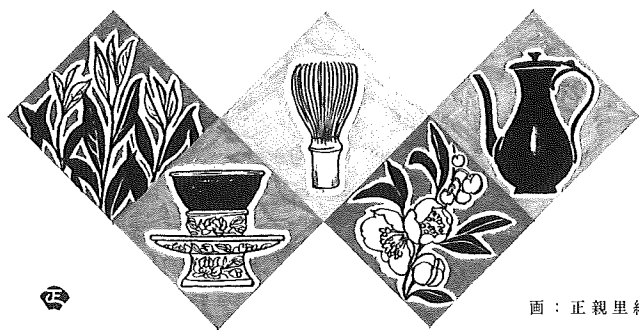


禪が伝えたお茶の話



画：正親里紗

第6回 重陽の節句とお茶の話

館 隆志

今回は、重陽ちやうようの節句とお茶の話を致します。重陽の節句は九月九日の節句のことです。から、九月号に書くにはびつたりのテーマです。ちなみに、旧暦ですと二〇二〇年は十月二十五日に当たるようです。日本では、端午も重陽も、新暦の日にはちを重視しますが、中国、台湾、韓国などでは旧暦を用いており、例えば中国や台湾ではこの日は祝日となっています。重陽はとても大切な日なのです。

重陽の節句は、中国を由来とし、陽数やうすう（奇数）である九が月と日ともに重なることを尊んで嘉よみするものです。陽数が重なることから重陽とも、九が重なることから重九ともいいます。

重陽の習俗としては、この日には、高い場所に登る習俗があり、宴が催され、茱萸しゆゆを用いる習俗、菊花を用いる習俗、重陽糕じやうやうこう（だんご）を食する習俗などがありました。重陽糕は、地方によっては糕ではなく粽ちゆうまが食べられました。茱萸は赤い実のなる植物で、はげしい赤い色や香りで辟邪へきじや（厄祓い）するとされます。

した。また、茱萸と菊花には延年の呪術的な効能が知られ、酒とともに飲むようになるのは、このような理由もあつたと思われまゝ。

このうち、唐代頃までの茱萸を用いる主流つた習俗に、頭に茱萸を戴く習俗「茱萸戴頭」があり、他にも茱萸を入れた袋を帯びる習俗「茱萸囊」が行われました。また、唐代は茱萸を酒に浮かべて飲む習俗「茱萸酒」もありましたが、あまり一般的ではなく、主流は菊花を酒に浮かべて飲む「菊花酒」が飲まれました。

しかし、宋代になると「菊花酒」の習俗は廃れ、「茱萸酒」が隆盛するようになり、宮廷行事としてわずかながら残っている他は「茱萸酒」が基本となっていました。また、宋代以降は菊花を視覚的に鑑賞する「賞菊」が行われました。

禪では、当時の中国で行われていた一般の習俗も、禪林に取り入れられたことを、端午の節句の時にもお話ししましたが、その一つが重陽の節句なのです。

宋代の中国で一般的に行われていたのが「茱萸酒」です。しかし禪寺ではお酒を飲むわけにはまいりません。そこで、宋代の禪林で新たに登場したのが「茱萸茶」です。酒の代わりにお茶を使い、お茶に茱萸を浮かべて飲むことが、宋代の禪林で行われていました。当時の文献によると味は「苦渋」と記されています。端午の菖蒲茶と同じように、茱萸茶も禪林独自の喫茶文化といえましょう。もちろん、茱萸茶も日本に輸入されました。

ところが問題だったのは、茱萸なんです。茱萸というと、日本ではグミ科の植物で果実が食用になる「グミ」として知られています。これはいつの時代からかグミに茱萸の漢字が当てられてしまったもので、本来は誤用です。もともと日本では古くから中世にかけて茱萸は「シユユ」と読んでおり、あるいは呉茱萸と呼ばれ、ミカン科の植物の一種のことでした。呉茱萸は重陽の節句には必要なものではありませんが、日本には自生していません。平安時代の宮廷行事では呉茱

莫の実は中国から輸入されたものが用いられていました。

鎌倉時代に日本で茶葉茶を飲むときも、中国から輸入した呉葉茶を用いていたようです。しかし、そんなに都合良く輸入できる寺院や僧侶ばかりではないはずです。そのため、日本では代わりに「菊花茶」を飲む場合が多々ありました。茶に菊花を細かくして浮かべて飲むのです。緑の茶に黄色い菊の花を浮かべた、色彩豊かな茶を想像することができます。

ところが、この「菊花茶」は中国宋代の記録にはないのです。禅林における菊花茶は、呉葉茶が無いという日本の環境により生まれることになったのではないのでしょうか。菊花茶は、あるいは日本にやってきた中国僧などによって開始されたものかもしれませんが、結果として日本独自の禅林文化となったのです。

重陽の節句では、禅僧は上堂説法するに際し、往々、茶に関連した説法を行いました。端午の菖蒲茶と同様、重陽の喫茶も一年に一

度の珍しい行事でした。禅僧たちは、茶が印象的である日を選んで、茶に関連する説法をしていたのです。中国での重陽の茶葉茶を受け継いで、日本でも重陽に茶を飲む禅林文化を継承しましたが、日本には呉葉茶の木は生えていなかったため、菊花茶が生まれたと考えられるのです。

この禅林における重陽の喫茶文化である茶葉茶や菊花茶は江戸時代までは伝えられていましたが、現在は完全に失われてしまっています。

さて、茶葉茶は別としても、菊花茶は簡単にできそうですし、彩りも華やかで美味しそうな気がします。抹茶をたてて、菊の花を刻んでぱらりと。素敵な重陽の節句になりそうですね。どうぞお試してください。

館隆志(たちりゅうし)

一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士(仏教学)。駒澤大学専任講師・花園大学国際禅学研究所客員研究員。著書に『園城寺公胤の研究』(春秋社)、『蘭溪道隆禅師全集』第一卷(共編、思文閣出版)。